霊宝館だより

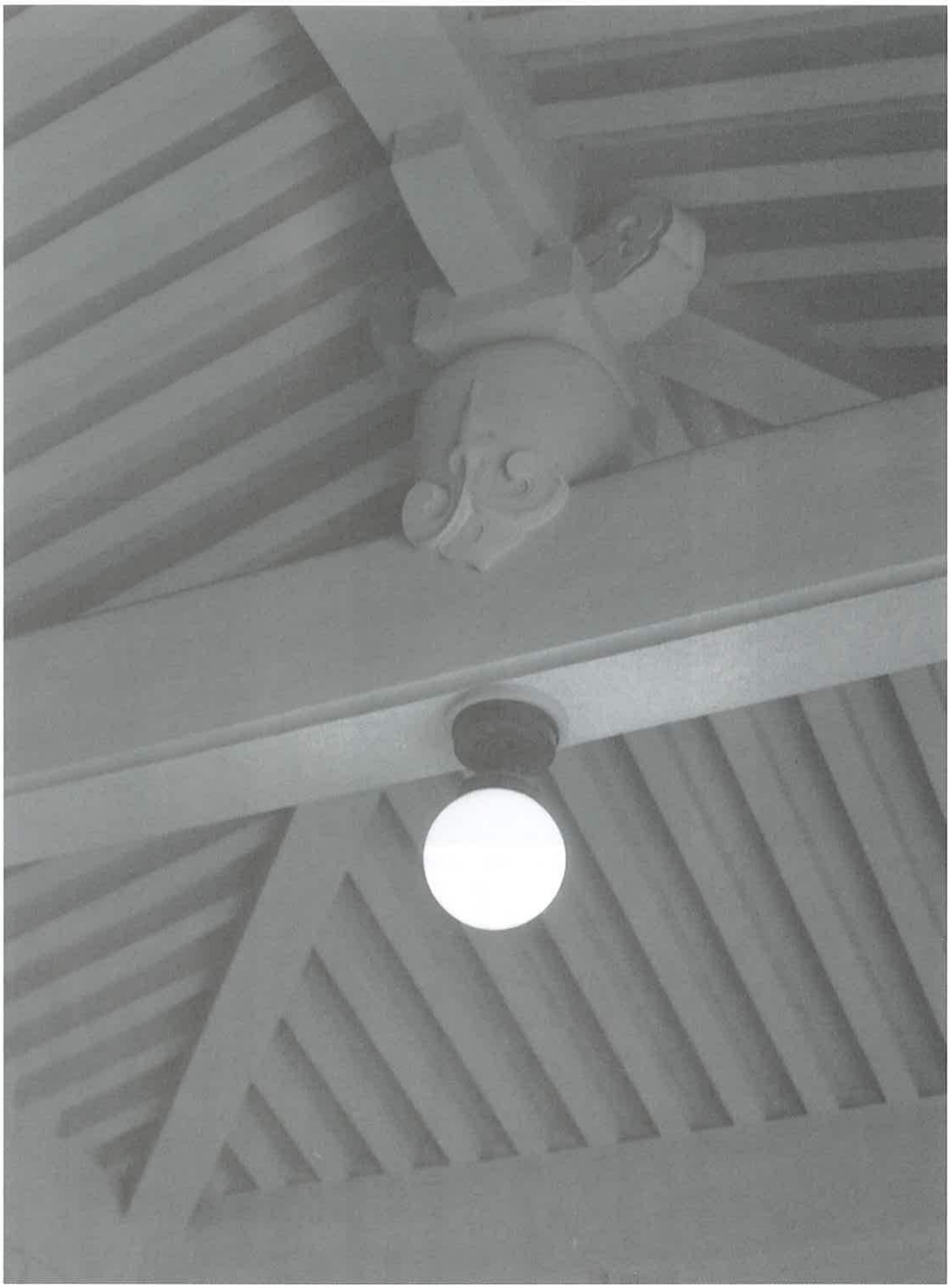
題字・畠野光義師

霊宝館だより 第96号
平成22年9月13日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
(財)高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736―56―2029
URL http://www.reihokan.or.jp

利用案内

開館時間
■5月1日～10月31日 8時30分～17時30分
■11月1日～4月30日 8時30分～17時00分

■休館日 年末年始のみ
■拝観料 大人 600円 高・大学生 350円 小・中学生 250円
■専用駐車場あり



大正ノスタルジー「霊宝」(霊宝館本館)

秋期企画展
海を渡る名宝－アジアの中の高野山

詳細は2～3頁をご覧ください

ご存じですか？
高野町内に住民票を有する方、高野町内の学校へ在籍している学生の方は、無料で入館できます。お気軽にお越しください。(住所を確認できる証明書、学生証等を受付に提示してください)

第96号 目次

秋期企画展のお知らせ……2～3
収蔵品の紹介70……4
中国古琴演奏会のご案内・宝物
　貸し出し情報……5
高野山の名鐘 総括編……6～7
フォトコンテスト作品募集……7
よもやま話vol.22……8～9
神は細部に宿る 第三章……10
霊宝館の庭園……11
新任のごあいさつ・時事報告……12

秋期企画展

海を渡る名宝―アジアの中の高野山

期間 10月2日（土）～12月12日（日）

重文 阿弥陀如来像 成福院

阿弥陀八大菩薩像 金剛峯寺

高野山に伝わる文化財の中には、はるばる海を渡って来たものも数多くあります。

秋期企画展では、中国や朝鮮半島からもたらされた名品を幅広く集め、高野山と近隣アジア諸国とのつながりを考えます。

絵画では、中国南宋時代、高麗から朝鮮時代にかけての仏画を多数出陳いたします。彫刻・工芸では、伝世品が数少ない中国唐時代の板彫曼荼羅や密教法具を、書跡では、国宝・文館詞林と、その江戸時代後期における「発見」にまつわる資料をご紹介します。また、高麗時代の華美を尽くした写経の数々も、ぜひご堪能ください。その中には、高野山へ奉納するために、博多の僧侶が買い求めたことがわかるものもあります。さらには、奥之院灯籠堂（とうろうどう）・御廟（ごびょう）周辺に埋納されていた、中国由来の磁器や古銭なども見どころのひとつです。

主な出陳品

絵画

重文	阿弥陀如来像 中国南宋時代	成福院
重文	如来像（伝薬師如来像） 中国南宋時代	金剛峯寺
	三仏諸尊集会図 中国南宋時代	親王院
	四季山水図（仇英筆） 中国明時代	宝寿院
	弥勒下生変相図 高麗時代	五坊寂静院
	阿弥陀八大菩薩像 高麗時代	金剛峯寺
	楊柳観音菩薩像 高麗時代	宝寿院
	地蔵菩薩曼荼羅図 朝鮮時代	宝寿院
	地蔵菩薩曼荼羅図 朝鮮時代	円通寺
	薬師三尊八大菩薩十二神将像 朝鮮時代	円通寺
	薬師曼荼羅図 朝鮮時代	常喜院

彫刻

重文	板彫胎蔵曼荼羅（甲面） 中国唐時代	金剛峯寺
重文	釈迦如来及諸尊像（枕本尊） 中国唐時代	普門院

工芸

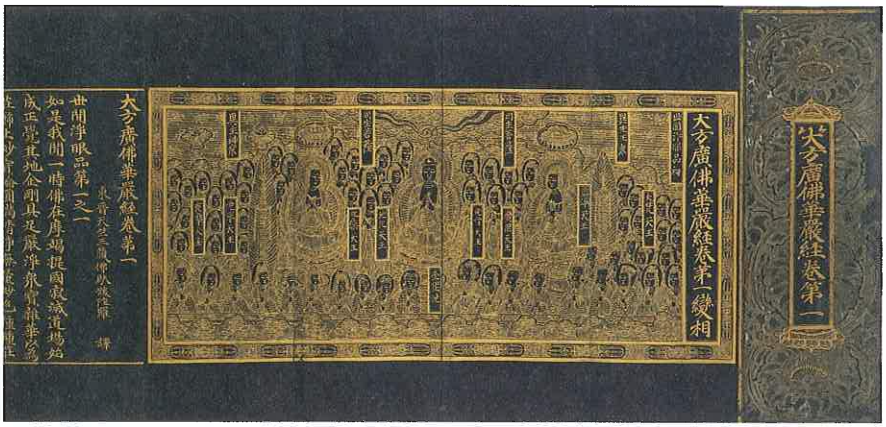
重文	金銅四天王独鈷鈴 中国唐時代	金剛峯寺

国宝　文館詞林　正智院

重文　金銅五鈷鈴　正智院

重文　金銅四天王独鈷鈴　金剛峯寺

重文　青白磁龍首水注（景徳鎮窯）　金剛峯寺



華厳経　五帖のうち巻第一　金剛峯寺

〈書跡〉

重文　金銅五鈷鈴（伝・道範所持）　中国唐時代　正智院
重文　銅梵釈四天王五鈷鈴　中国宋時代　竜光院
重文　金銅独鈷杵　中国唐または平安時代　金剛峯寺
重文　成身会八葉蒔絵厨子　鎌倉時代　金剛峯寺

国宝　文館詞林　十二巻のうち　中国唐または平安時代　正智院
国宝　文館詞林残巻　中国唐または平安時代　宝寿院
重文　梵本大般涅槃経断簡　中国唐時代　宝寿院
重文　宋版一切経　中国南宋時代　金剛峯寺
重文　高麗版一切経　高麗時代　金剛峯寺
華厳経　五帖のうち　高麗時代　金剛峯寺
華厳経巻五十一　高麗時代　金剛峯寺
紺紙金字妙法蓮華経　八巻のうち　高麗時代　金剛峯寺
紺紙銀字妙法蓮華経　七帖のうち　高麗時代　金剛峯寺
茶紙銀字妙法蓮華経　七帖のうち　高麗時代　金剛峯寺
文館詞林関係文献　江戸時代　正智院

〈考古〉

重文　蓮弁文青磁花瓶（龍泉窯）　中国宋時代　金剛峯寺
重文　青白磁花瓶（景徳鎮窯）　中国宋時代　金剛峯寺
重文　青白磁龍首水注（景徳鎮窯）　中国宋時代　金剛峯寺
重文　蓮弁文青磁合子（龍泉窯）　中国宋時代　金剛峯寺
重文　白磁四耳壺（福建省民窯）　中国南宋時代　金剛峯寺
重文　古銭　中国唐～明時代　金剛峯寺

ミュージアムトークのご案内

11月21日（日）
午後2時～（40分程度）

当館学芸員による展示解説を行います。
（事前申し込み不要）

関連イベント
「中国古琴」お話と演奏

平成22年10月10日（日）

詳細は5ページをご覧ください。

収蔵品の紹介 70

重要文化財

木造釈迦如来及諸尊像（枕本尊）

中国唐時代　八世紀　普門院

高さ一七・三cm

小さな厨子に仏像を納めて、持ち運びをできるようにしたものを一般的に枕本尊といいます。厨子の形が枕に似ているため、この名があります。

本像は漆塗りの厨子（後補）に納められた檀木製の仏像群で、五つのパーツから成り立っています。まず中央には釈迦如来を中心に両側に脇侍菩薩と比丘（僧）が二尊ずつ配されます。その左右に各五尊の如来像、下部には植物文や花文が透かし彫りされた材が組み合わされています。中央部分はその上に供養者・仁王・獅子・飛天らが透かし彫りされた薄い板をはめ込むつくりになっており、奥行きのある荘厳された空間が表現されています。彩色は素地に一部赤と緑が施され、文様と相まってエキゾチックな雰囲気が感じられます。

板をはめた状態

制作は中国・唐時代とみられ、金剛峯寺の国宝諸尊仏龕（弘法大師空海請来）とほぼ同時代のものであり、寺外不出とされていたためか保存状態も良く大変貴重な優品です。

『紀伊続風土記』によると越前（現在の福井県）丸岡藩主であった本多飛騨守重昭（一六三四～一六七六）が普門院に奉納したとあり、厨子裏銘の「本多飛騨守」は彼のことを指すと思われます。他に寛文三年（一六六三）の寄進状のある舎利や仏像なども奉納品として記されています。本多重昭奉納品は金剛峯寺にも多く伝わっています。また、本厨子は漆塗箱に納められてさらに大きな厨子（高三五・〇cm）に入った状態で霊宝館に収蔵されており、この外側の厨子には万治二年（一六五九）の銘があります。いずれの厨子にも普門院阿闍梨実秀（一六〇五～一六八四、第二六五世寺務検校、明暦二年〔一六五六〕より普門院に入る）の名が記されており、万治二年には普門院に伝わっていたことがわかります。残念ながらそれ以前にはどこにあったのかは不明です。像自体については弘法大師作の伝承はともかく、弘法大師と何らかの関係があったのでは、と思わせる遺品です。（F）

（厨子裏銘）
為本多飛騨守二世安楽也
赤梅檀釈迦弘法大師御作也
高野山普門院阿闍梨実秀

（外側厨子裏銘）
赤梅檀秘釈迦弘法大師御作也
高野山谷上普門院永代不出本尊也
万治二年己亥九月十八日阿闍梨実秀

秋期企画展

「海を渡る名宝―アジアの中の高野山」関連イベント

中国古琴（ちゅうごくこきん） お話と演奏

平成22年10月10日（日）
入場無料
高野山霊宝館　迎賓館（げいひんかん）
午前の部　11：00～11：45
午後の部　14：00～14：45

この秋、霊宝館では、日本における数少ない古琴演奏者の一人・橘田勲（きったいさお）氏をお迎えし、お話をまじえた演奏会を開催いたします。弘法大師空海も唐で耳にしたであろう古雅な調べ、あなたもぜひお楽しみください。

曲目：憶故人（おくこじん）、普庵呪（ふあんじゅ）ほかを予定。（変更する場合があります）

お問合せ　高野山霊宝館　イベント係

電話　〇七三六―五六―二〇二九（お席のご予約もできます）

古琴

三〇〇〇年の歴史をもつ中国の古い伝統楽器です。二〇〇八年に世界無形文化遺産に登録されました。精神修養の楽器として大切にされ、文人が身につけるべき四つの技芸「琴棋書画（きんきしょが）」の筆頭にあげられてきました。七本の絃をもつことから、「七絃琴（しちげんきん）」ともよばれます。琴柱はなく、「徽（き）」とよばれる十三のしるしに従い、左手で絃を押さえ、右手で弾きます。バリエーション豊かな奏法も、魅力のひとつです。

企画展で展示される絵画にも描かれています
明・仇英「四季山水図」のうち夏（部分）

演奏：橘田勲（きったいさお）

中国音楽研究者。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。一九九九年より二〇〇一年まで、中国北京の中央音楽学院に音楽学の高級進修生として留学。袁静芳（えんせいほう）教授、林石城（りんせきじょう）教授等に指導を仰ぐかたわら、李祥霆（りしょうてい）教授に師事し古琴を学ぶ。現在、「中国近世における文人と音楽との関わりにおける多面性」を主たる関心領域として中国音楽史を研究しつつ、古琴の弾奏にもいそしむ。東洋音楽学会、日本音楽学会、民族藝術学会会員。

宝物貸し出し情報

■「鑑真と空海―日中文化交流の顕彰―」中国・上海博物館
平成二十二年九月二十九日（水）～十一月二十三日（火）

弘法大師坐像（萬日大師）金剛峯寺

上海で開催中の万国博覧会に合わせ、萬日大師像が中国に渡ります。

■「高僧と袈裟（けさ）　ころもを伝えこころを繋（つな）ぐ」京都国立博物館
平成二十二年十月九日（土）～十一月二十三日（火・祝）
国宝　紺紙金銀字一切経のうち二巻
金剛峯寺　ほか

■白州正子「神と仏、そして祈り」滋賀県立近代美術館　ほか二カ所
平成二十二年十月十九日（火）～十一月二十一日（日）
重文　丹生明神像・高野明神像
金剛峯寺　ほか

連載

高野山の名鐘

総括編

平成十八年二月十日発行の霊宝館だより第七十八号から十六回に亘り、高野山の鐘を紹介してきました。連載当初は井筒信隆前霊宝館副館長が記事を担当し、昭和三十八年に坪井良平氏が調査しまとめられた報告書『高野山の梵鐘』をもとに其の十一まで十一口の鐘を紹介しました。副館長の退任にあたり、その後、其の十二から今回までを現在の筆者が担当しました。坪井氏の調査以後に鋳造された新しい鐘も含め、高野山の鐘楼堂などにある由緒ある鐘はほぼ一通り紹介し終えました。（次頁表参照）

南院の庭に鐘がありますので、最後に紹介します。南院の縁側に二口の鐘が並んで置かれています（写真1）。

写真1：南院の縁側に並ぶ大小二口の鐘

大きい方で約七十センチ、小さい方の鐘は約二十二センチと小型です。小さい方は無銘で年代も由緒も分かりません。大きい方の鐘には「高野山／南院／昭和二十四年七月／神戸弘南講／講主中西米蔵」とあり、年代と施主のみが刻まれています。しかし、現在は弘南講という講もなく、中西米蔵さんのことも詳しくは分かりません。大きさから本堂の入口に掛けられていた半鐘と思われます。現在、本堂には新たな半鐘があり「広島市隆安寺住職松本隆昭」「信徒熊本夏子　中本玉枝」と撞座の上にそれぞれ記されています（写真2）。しかしその他の銘文は無く、年代も不明です。南院様のお話によりますと、松本隆昭師は二十年ほど前にご遷化され、その後に隆安寺は廃寺となったそうです。隆安寺の一部の信徒さまが広島浪切不動講として、夏季祈りにご奉仕されておられます。（夏季祈り…旧暦五月一日・二日南院のご本尊浪切不動明王像を伽藍山王院にお祀りし、招福除災を祈る法要）

写真2：本堂にかかる新しい半鐘

高野山では本堂の入口に半鐘を掛け、お勤めの時に合図として打ち鳴らすため、このような半鐘は各寺院にあると思います。しかし、大半は南院の鐘と同様に無銘であったり、ごく最近のものであります。よって、ここで連載を終了し、今後新たに分かったことがあれば随時紹介させていただきます。長い間ご愛読ありがとうございました。（K）

これまでに紹介した高野山の鐘年表

西暦	年号	紹介した鐘	連載番号	霊宝館だより掲載号
1210	承元４	金剛三昧院の鐘	連載其の７	No.85
1280	弘安３	霊宝館収蔵の鐘（１）	連載其の２	No.79
1456	康正２	金剛峯寺鐘楼堂の鐘	連載其の12	No.90
1504	永正元	霊宝館収蔵の鐘（２）	連載其の３	No.80
1547	天文16	大塔の鐘	連載其の１	No.78
1620	元和６	宝幢院の鐘（現宝寿院）	連載其の６	No.83
1635	寛永12	金剛峯寺六時の鐘	連載其の４	No.81
1661	寛文元	持明院の鐘	連載其の５	No.82
1670	寛文10	円通寺の鐘（本堂）	連載其の14	No.92
1688	貞享５	大円院の鐘	連載其の10	No.88
1757	宝暦７	親王院の鐘	連載其の13	No.91
1778	安永７	円通寺の鐘（山門）	連載其の９	No.87
1783	天明３	普賢院の鐘	連載其の８	No.86
1846	弘化３	伽藍御社の鐘	連載其の11	No.89
1949	昭和24	南院の鐘	連載総括編	No.96
1971	昭和46	清浄心院の鐘	連載其の15	No.93
2009	平成21	光臺院の鐘	連載其の16	No.95

第五回高野山霊宝館もみじ祭 フォトコンテスト作品募集

今年のフォトコンテストはテーマを「お気に入りの高野山」として、皆さまに高野山の良いところを見つけていただこうと思います。

初めて参拝して心に残った場面、何度訪れても好きな場所、誰かに教えたくなる高野山の魅力など、あなたのお気に入りの高野山の写真を募集いたします。写真にはお気に入りの理由やエピソードなどを添えて、お気に入りをアピールしてください。たくさんのご応募をお待ちしております。

募集要項

◆作品テーマ　「お気に入りの高野山」

◆作品規定

①Ａ４版（21×29.7cm）にプリントされたカラーまたはモノクロ作品。（プリント紙の種類は問いません。）

②撮影場所とその写真に関するコメントを200字程度で添えてください。（書式は自由ですが、楷書でお願いします。）

③作品の裏面に天地が分かるように上端に「上」と記載し「氏名」「住所」「年齢」を明記してください。

④応募者１名につき１点の応募。

応募期間：平成22年11月1日（月）～11月30日（火）当日消印有効

◆注意事項

・フィルムカメラ、デジタルカメラで応募者が撮影した写真に限ります。

・フィルムやデータでの応募は受け付けません。

・ソフトウェア等による著しく加工された作品は応募出来ません。

・応募作品は返却出来ませんのでご了承ください。

優秀作品には賞状・副賞を贈呈し、霊宝館での展示や霊宝館だよりへの掲載を予定しております。

フォトコンテスト応募先・お問い合わせ先

高野山霊宝館「もみじ祭」係　電話 0736－56－2029

〒648－0211 和歌山県伊都郡高野町高野山306

よもやま話 Vol.22

高野山霊宝館という施設

高野山霊宝館は県の教育委員会の認可を受けて、博物館相当施設として登録されています。この「相当施設」という四文字からは、正式な博物館ではないけれど、それに近い働きをする施設といった、ある意味、ビミョーな位置づけという雰囲気が感じ取れます。

博物館法によりますと、博物館相当施設とは「博物館の事業に類する事業を行う施設」とあり、そこには「学芸員に相当する職員を置く」と、少しややこしい文言で定められています。

実は、私立の動物園や水族館のほとんどは博物館に類する事業を行う施設として、博物館相当施設となっています。相当施設となる理由としては、観光を目的とした営業施設、あるいは公園設備であることによるものとされています。

その意味からすると霊宝館は、博物館に類するものであるのと同時に、高野山観光の一施設（宝物館）という位置づけであると理解することができます。また学芸員資格を有していなくとも、それに相当する職員がいれば良いことになるようです。

とはいえ、相当施設ながらも博物館という名前が付き、それに相当する仕事も行っているからには、一応、博物館活動の基本となる、「収集、公開、保存、調査研究、教育普及」を行うことに変わりはないと、わたしは信じています。

では実際に霊宝館ではどのように博物館活動を行っているのか、その活動の中から収集、公開、調査研究の三つについて、簡単にご紹介させていただきます。

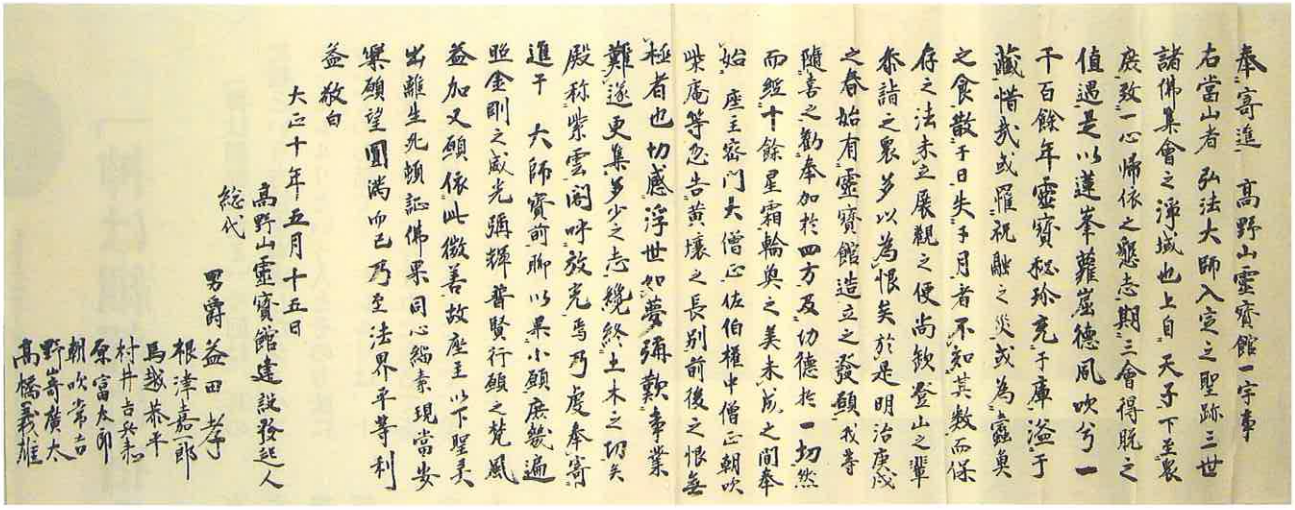
収集に関しては、館独自で作品を新たに購入することはありませんので、基本としては高野山内の各寺院より宝物をお預かりし、保存することになっています。

公開については、霊宝館では年に数度の企画展、特別展、平常展を開催しており、一年を通じてだいたい三五五日間の長期にわたって開館しています。これは、博物館法に定められた年間百日以上（登録博物館は一五〇日以上）開館しなければならないとする要件からしても、充分過ぎる程に満たしていることになります。一般の公立博物館などでは年間五十二日以上の休館日があるようですが、霊宝館は年末年始の約十日間のみとなります。こうした現状の開館日数からしても、霊宝館が観光の一施設だということがうかがえます。

しかし、開館日数が長期間に及べば、当然、展示する文化財の種類によっては寿命を縮めることになり、博物館としての重要な役割である「保存」との兼ね合いに、わたしたち館員は、ずいぶんと心を悩ませることになります。時に拝観者の方々からは、「国宝の仏涅槃図や阿弥陀聖衆来迎図、八大童子像は常に出てないの？」と尋ねられるのですが、保存のことを考えると、長期の展示はできるだけ避けなければなりません。展覧会を催すことで出品回数を増やしておりますので、ご理解いただければと思います。

次に調査研究ですが、現在霊宝館では大量の収蔵品を再整理しつつあります。この作業には何年も前から取り組んでいるのですが、未だ完遂していません。担当職員の怠慢だと言われれば返す言葉がないのですが、なにぶん五万点ともされる収蔵量があり、その間に展覧会の準備が入ったり、受付や日常業務が忙しくなったりすると、気持ちは焦るばかりで、作業の方は遅々として進みません。

その作業内容はというと、研究などといった聞こえの良いものではなく、宝物データの作成を行っています。詳細な寸法をとったり、宝物の名称を再検討し、収蔵番号を決めてラベルを付け、収蔵棚の位置を決めていきます。そして、必要と思われるものは写真撮影を行っているのですが、こうした作業は収蔵庫内などに潜り込んで行うため、派手やかな展覧会事業からすると、なんとも地味な作業となります。しかもその成果は直ぐには見えてこないので、評価を求めるタイプの人には向いていない仕事といえるのかも知れません。さらに言えば、例えば調査品目に興味が有りすぎる担当者がこの作業を行うと、どんどんと深く調べてみたくなる欲求に負けて、作業はさらに進まなくなるといった悪循環に陥いることになります。


奉寄進　高野山霊寶館一宇事
右當山者　弘法大師入定之聖跡三世
諸佛集會之淨域也上自　天子下至衆
庶致一心帰依之懇志期三會得脱之
値遇是以蓮峯羅嵐德風吹兮一
千百餘年靈寶秘珍充于庫溢于
藏惜哉或罹祝融之災或為蠹魚
之食散于日失于月者不知其數而保
存之法未立展觀之便尚欽登山之輩
恭詣之衆多以為恨矣於是明治庚戌
之春始有靈寶館造立之發願我等
隨喜之勸奉加於四方及功德於一切然
而經十餘星霜輪奐之美未成之間奉
始座主容門大僧正佐伯權中僧正朝吹
柴鹿等忽告黄壌之長別前後之恨無
極者也切感浮世如夢彌歎事業
難遂更集多少之志纔終土木之功矣
殿称紫雲閣呼放光号乃度奉寄
進于　大師寶前聊以果小願庶幾遍
照金剛之威光踊輝普賢行願之梵風
益加又願依此微善故座主以下聖衆
出離生死頓証佛果同心緇素現當安
樂願望圓滿而已乃至法界平等利
益敬白
大正十年五月十五日
高野山靈寶館建設發起人
総代　男爵　益田孝
根津嘉一郎
馬越恭平
村井吉兵衛
原富太郎
朝吹常吉
野崎廣太
高橋義雄

霊宝館一宇寄進状

内容を要約すると次のようになります。

「高野山には霊宝（文化財）が各寺院の蔵に満ちているのに、時に火災や散逸によって失われていくのは誠に惜しい。そこで明治43年に保存と展観の施設を建設すべく思い立った。多くの賛同者の寄附によって、今、紫雲殿と放光閣からなる霊宝館が完成し、ここに寄進するものである。大正10年5月15日　高野山霊宝館建設発起人総代　男爵益田孝　根津嘉一郎　馬越恭平　村井吉兵衛　原冨太郎　朝吹常吉　野崎廣太　高橋義雄」

さて、こうした地味な仕事に従事している中での話ですが、現在、収蔵庫では書跡関係の調査と整理を行っています。時として、古文書などに作品名をつける際には悪戦苦闘しています。それは、名称によって内容がある程度理解されなければならず、かといって余りに長いものは避けなければなりません。でもせっかく付けた名称なのに、次の日には思い返して変更することもしばしばです。

しかし近代の資料ともなれば、さほど難しくはありません。その中で、「霊宝館一宇寄進状」（以下「寄進状」とします）と、ほとんど内題そのままに名称を付けて登録したものがあります。その寄進状は内容もさることながら、存在そのものによって、霊宝館の本館が寄進された建物であったことを改めて認識させてくれることになりました。紙面の都合で寄進に至るまでの経緯を記すことはできませんが、寄進者の多くは、数寄者をはじめとする政財界の篤志でした。

霊宝館の開館式は大正十年（一九二一）五月十五日、午前十時より執り行われました。場所は本館正面の紫雲殿で、金剛峯寺座主兼初代霊宝館館長土宜法龍大僧正と霊宝館建設発起人総代益田孝氏とが相対面した上で開会となり、そして、益田孝氏によって寄進状が読み上げられました。土宜法龍初代館長は、南方熊楠とも親交があったことで近年に取り上げられたことがありますので、ご存知の方もおられるかと思います。一方の益田孝氏は三井物産社長で、晩年に弘法大師筆座右銘を入手、その披露の茶会として政財界の数寄者を招いて「大師会」を創始したことで知られています。

また寄進状には、発起人総代の一人である馬越恭平氏が読み上げた「祝辞」も納められていました。馬越氏は当時、日本のビール王とも呼ばれた実業家でした。その祝辞には、霊宝館を建てることで多くの人々に観覧してもらい、それは高野山一山のためばかりではなく社会のためでもある、といった詞が記されています。

霊宝館建設にかける財界人の思いと関係者の努力は計り知れないものだったようですが、急激な物価の上昇などにより、何度かの挫折を経て、当初の設計計画を半分に縮小しての建設となりました。その建物も、人間でいうと、今年で八十九歳となりました。当然、空調はありませんし、開館当時から長い間は照明設備もありませんでした。そんな本館ですので、現在の施設のようにバリアフリーにも対応していませんし、館内がカビ臭いとのお叱りも受けています。

こうした古く特殊な建物を改修して維持するには、なおも多くの問題を抱えています。しかし、寄進者の思いや、その目的を将来に伝えるためにも、現状の姿で遺してもらいたいと願わずにはいられません。また近年、そうした方向に進みつつあるとも感じています。

今回の調査で寄進状を手にした時、霊宝館本館の建物を今後どのように活用し維持していくのかが現在の私達に与えられた一つの課題であり、使命なのかも知れない…などと偉そうなことを考えながら、寄進状に新たな収蔵番号を付け終わりました。　（M）

コラム

「神は細部に宿る」（God is in details）

第三章

「神は細部に宿る」今回は、耳の比較という方法を考案したジョバンニ・モレルリという人とその方法についてのお話です。モレルリは、十九世紀イタリアに生まれた医者であり、自然科学者でもあった人で、美術研究も行っていました。このモレルリが作品の真贋判定や作者特定の方法として耳の比較を考案するのですが、彼は耳だけでなく、様々な細部を比較していきます。では、なぜ細部を比べたのでしょうか？

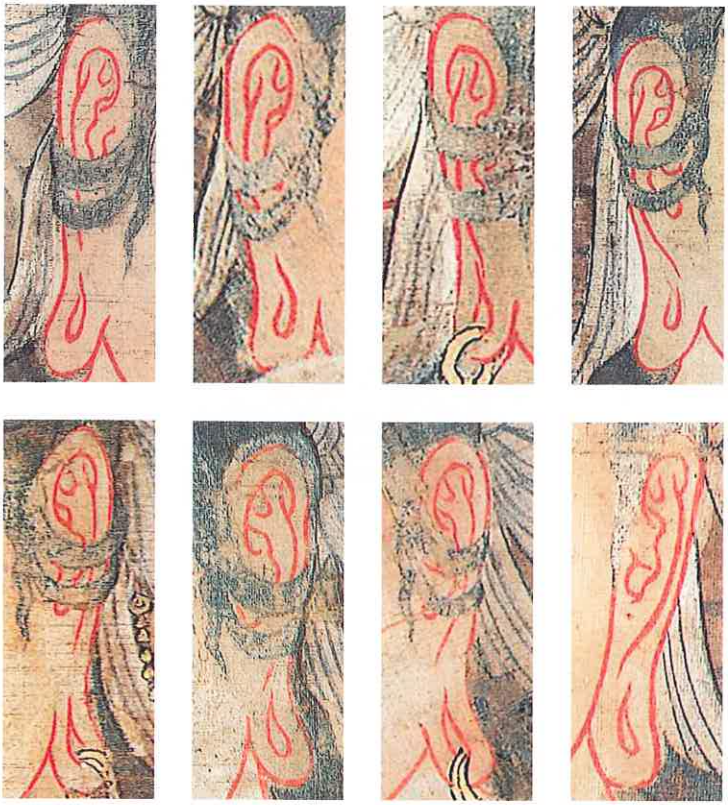
これまでの美術品の鑑定方法は、全体を見て最も重要とされる部分、もしくは全体の描き方などに注目し、その作家の個性が表れているかどうかを判断し、真贋と作者を判断していました。しかし、偽物を作る場合、同じ所に着目して真似するのは当然のことです。ですから、この方法では信頼性が低かったようです。そこで、モレルリは逆に人があまり意識しない人物の指先や爪、耳など細部に眼を付けたのです。身体全体や顔の表現は意識しても、耳や爪の形は無意識のうちに大体いつも同じように描いてしまう。つまり、自らの筆の動くままに描くのではないか。そこに、自分でさえも意識しなかった個性が表れるのではないか、と考えました。それは、偽物を作る者にとっても同じで、爪や耳などの細かい部分を真似ることはせず、やはり全体の表現や重要な部分を真似るのです。よって、あまり意識の行き届いていない所を比べれば、誤りなく作者を示すと考えたのです。モレルリの言を引用しますと、「個性的な努力の最も弱い部分に個性が見出される」ということです。

実際に細部を比べていくと、本当に作家の個性がそこにあったのです。同じ作家であれば、その作品に描かれる指先、爪や耳などは少しの違いこそあれ、大体いつも同じように描かれていました。モレルリの考えたとおり、作家は細部を描く際にはあまり意識をせずに筆の動くままに描いていたのです。これは、彫刻でも同じでした。細部の表現に作家の個性があるということが出来た訳です。つまり、「神は細部に宿っていた」のです。

これは、芸術の世界にだけ当てはまることではありません。普段私たちが意識しない動作にその人の個性が表れていることはよくあります。歩き方や、あくびなど、ちょっとした仕草を思い浮かべてみて下さい。個性がよく表れているはずです。

そこに眼を付けたモレルリは、芸術作品にそれを当てはめました。すると、全体は同じように見えても、意識せずに描かれた細部は、違った描き方をしている作品が多く見付かり、それらは偽物であったという例が出てきました。これ以後、モレルリ法と呼ばれるこの方法は、芸術の世界でひろく採用されていきました。

次回は高野山の仏像でこの方法を試してみましょう。（T）



国宝「阿弥陀聖衆来迎図」に描かれた菩薩達の耳です。どれもよく似た形で描かれていますね。来迎図の作者は、耳を描く時、意識せず筆の動くままに描いたことがよく分かります。

霊宝館の庭園

ノリウツギ・糊空木・鰾膠木・さびた

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

ウノハナという別名でも知られているウツギは卯月（陰暦四月）の花、幹や枝に中空の部分があることによる空木、硬くて丈夫な幹材で木釘がつくられたので打つ木、などが和名命名の理由だそうです。

ここで紹介するノリウツギはウツギと同じユキノシタ科（最近のDNA分析による植物分類ではアジサイ科とされている）の落葉低木ですが花期は卯月ではなく、梅雨が明けて盛夏を迎え、高野山でも自生の樹の花が少なくなった七月中旬から九月末頃です。

枝の先々に少し離れたところからでは粒状に見える小さな五弁の両性花が沢山集まり、その周辺部に白い小さな蝶が多数とまって蜜を吸っているような格好の萼片四枚からなる装飾花が咲きます。

ノリウツギという和名は、幹の内皮が和紙漉き用の糊料とされた空木・糊空木によります。この木の幹材も木釘に利用されたそうですから、糊打つ木でもあります。

別称や方言名も、鰾膠木、にべ、のりのき、ねりのき、とろろ、とろろのき、など内皮から和紙漉き用の糊が採られたことに由来するものが数多くあります。鰾膠というものは魚のうきぶくろを煮詰めてつくる粘着力の強い膠であることを知りました。

現在は、紙漉き用糊の原料として中国原産のアオイ科・トロロアオイという観賞用にも栽植されている草の根が、よく知られています。

さびた、という別称・方言名は、この樹種の生態上の特性によるものです。沢（谷）ぞいの、日当たりのよいところに葉枝をひろげて自生することの多い低木です。その様を沢に蓋をしているようであると見ての沢蓋が転訛したものとされています。

なお、この木は温帯林をつくる先駆樹種の一つで、高野山でも伐採跡地に、早々に生えてきます。

幹材は楊枝（子）、鎌の柄、木樽の呑口、白箸などにも。根材ではパイプがつくられたそうです。

高野山や近郷の子供たちが中空の幹をあなっぽと呼び、それを採って笛をつくり、幹の中心部の髄を細長い棒で突き出したスポンジのような弾力性のある白い紐状のものを三～四センチに切り、すっぽんと名付け口に含んで音をたて遊んだということを先人の遺された書き物から教わりました。

花枝（両性花と装飾花）

幹と葉（庭園林内）

ごあいさつ

高野山の文化財の中核として

高野山霊宝館長　静慈圓

このたび霊宝館長を拝命いたしました（平成二十二年七月）。

私は、昭和十七年徳島県のお寺で生まれました。昭和三十六年高野山大学に入学して以来、弘法大師空海の研究に邁進してきました。平成二十一年三月高野山大学を退職しました。現在、高野山清涼院の住職です。

高野山と霊宝館の概況を述べましょう。

弘法大師空海（七七四―八三五）が開創した高野山は、あと五年で一二〇〇年を迎えます。

高野山は、弘法大師を戴いて、日本の歴史の中で、各時代の人たちに救いを与えながら生きてきた「信仰の山」です。また弘法大師の「さとり」そのものが救いの思想として研究され、一二〇〇年の間積み上げられてきた「学問の山」です。

この山は、信仰、学問にとどまりません。日本文化史上の巨人としての大師の多方面にわたる業績から始まり、文学、語学、密教絵画、仏像彫刻等が蓄積されてきました。まさに『山の正倉院』の名にふさわしい宝の山です。

お山の宝物は、高野山全域にわたりますが、「霊宝館」は、特に貴重な品々を収蔵しています。文化財として、国宝二十一件（四六九三点）、重文百四十一件（二〇二五六点）、未指定品になると五万点以上となります。まさに文化財の宝庫です。高野山の歴史の深さの中にあって「霊宝館」はその中核といえるでしょう。

「霊宝館」は、一二〇〇年の文化財を守ることはいうまでもなく、この宝物を現代の多くの人たちに見ていただきたいとの思いも強く持っています。

弘法大師の言葉に「密教は宝の蔵を開く」とあります。霊宝館の扉を開くことは、あなた自身の宝の蔵を開くことでもあります。

高野山の参拝の折には、ぜひ霊宝館へ足をお運びください。

新任ごあいさつ

四月から霊宝館（高野山文化財保存会）に勤務することになりました。仕事は会計業務、補助事業、日直の時の受付業務で拝観者と接することができ、嬉しく思っています。外国人観光客も多く、誰にでも笑顔でこころよく出迎えて、気持ちよく帰ってもらえるよう努力しています。拝観者に何度でも来たいと思ってもらえるよう、一人ではなく霊宝館職員全員が努力しなければと思っています。

霊宝館の拝観者は、例年金剛峯寺の参拝者の約三割です。これを五割に持って行けたらと思う次第です。

福井　崇司

時事

夏期特別展終了まぢか！

九月二十六日まで

ご好評をいただいている夏期特別展「ちいさなほとけさま」、九月二十六日（日）で終了となります。ぜひお見逃しなく。会期中、七月三十一日（土）・九月十一日（土）には、ミュージアムトーク（展示解説）を行いました。多数の方が参加され、熱心なご質問をいただきました。

アンケートへのご協力ありがとうございました

夏期特別展期間中、来館者の皆様を対象に、アンケートの記入をお願いいたしました。ご協力ありがとうございました。いただいた貴重なご意見を今後の運営に反映させ、より多くの方に満足していただける霊宝館をめざします。